

要旨

本研究は、Hara (2019)らが指摘するように上昇イントネーションを伴うダロウカが容認されない一方、ダロウと基本的な共通点を持つシヨウの疑問形シヨウカが上昇調で容認されるのはなぜか考察する。その際シヨウは補部としてPROを主語とする節を取ると提案し、シヨウが誘いかけを表すこと、即ち行為主体に話し手だけでなく聞き手も含まれることをpartial controlとして説明する。さらにHara (2019)による疑問とダロウの分析を援用しつつ、上昇調のシヨウとシヨウカがそれぞれ誘いかけと申し出を表すことに対して、問いかけとしての適切さという観点から説明を試みる。さらにダロウとシヨウはどちらも同様の働きをする様相オペレータであるが、前者は認識論的様相基盤を持つのにに対し後者は目的論的様相基盤を持つと主張し、上昇調のダロウカとシヨウカの容認度の違いは最終的にはこうした様相基盤の違いに帰着すると提案する。

1 はじめに

推量を表すダロウと意志を表すシヨウは、1) 「過去になることもなければ否定になることもない」(仁田 1991: 53)、2) 例(1a-b)が示すように推量・意志の主体は基本的に話者に限られる、3) 疑問形ダロウカとシヨウカは基本的に自問を表す、という共通点を持つ。

(1)a. {私/*君/*彼}の考えでは、この事件の犯人は捕まるだろう。

b. {俺/*君/*彼}、それに決めちゃおうかな。(仁田1991: 174)

疑問形が対話的文脈で用いられる場合には、話し手と聞き手の「融合型視点」をとることがあるが、その場合でも話し手の推量・意志を表すという特徴は存続する。例えば宮崎 (2005: 72)によると(2a)ではダロウカが「話し手だけでなく聞き手も知らないことについて問いかけ、意見を求めるために使用されて」おり「当該情報に対する知識状態に関して、話し手と聞き手が同じ立場にある」。(2b)では「パーティーに行く」ことに関し聞き手に対する誘いかけが行われている。

(2)a. ねえ、この事件の犯人は捕まるだろうか？(宮崎 2005: 72)

b. 僕たちも明日のパーティーに行こうか。(同上)

疑問文において推量・意志の主体の転換が起こらないという点で、ダロウカとシヨウカは推量を表すチガイナイや希望を表すタイと異なる。例えば(3)ではチガイナイと判断するのは聞き手であり、チガイナイは「聞き手のもの化された対象世界の蓋然性」(仁田 1991: 174)を表す。シヨウと同様、希望を表すタイもその希望の主体は、(4a)が示すように平叙文では一人称に限られるが、(4b)が示すように疑問文では二人称に変換される。

(3) [君が得ている情報では] 本当にそうに違いないのか？(仁田 1991: 174)

(4)a. {私/*君/*彼}、彼女と結婚したい。

b. {*私/君/*彼}、彼女と結婚したい？(同書 p. 167)

仁田 (1991: 173)はこうした現象について次のように説明している。平叙文における推論・希望は話者の心的態度を表すが「話し手が直接的に把握・表現できるそれは、話し手の心的態度以外にはない」。さらに推論・希望の疑問文においては「聞き手が直接的に伝えるものとして、話し手が聞き手に問いかけることができるそれは、聞き手の心的態度以外にはないであろう。[...] このことが [...] 人称転換を引き起こすことになっている」。一方ダロウ、シヨウは「常に話し手の心的態度を表し、素材化・聞き手のもの化されることがないことによって疑いに留まり基本的に問いかけの対象になることがない」(同書 p. 174) ため人称の転換が起こらない。以上の共通点から仁田 (1991)はダロウとシヨウを真正モダリティ形式として平行的に扱っている。推論などの証拠性を表す形式を含む疑問文において判断の主体が話し手から聞き手に変換することはinterrogative flipと呼ばれるが (Bhadra 2020等参照)、真正モダリティ形式であるダロウとシヨウはinterrogative flipを引き起こさないという共通点を持つ。

このようにダロウとシヨウは基本的な共通点を持つが、疑問文において異なるふるまいも示す。まずダロウの疑問形について、Uegaki & Roelofsen (2018)、Hara (2019)は、下降イントネーション(以下↓と略す)のダロウカ(5a)と、上昇

イントネーション(以下↑と略す)のダロウ(5b)は容認されるのに対し、上昇イントネーションのダロウカ(5c)は容認されないことを指摘している。そしてこのことを、i) Uegaki & Roelofsen (2018)は上昇調の「ダロウカ↑」は結局下降調の「ダロウカ↓」と同じ意味を表すから、ii) Hara (2019)は上昇調の「ダロウカ↑」では意味的タイプのミスマッチが生じるから、と説明している。

- (5)a. マリーはワインを飲むだろうか? ↓(Hara 2019の(8))
- b. マリーはワインを飲むだろうか? ↑(Hara 2019の(15))
- c. *マリーはワインを飲むだろうか? ↑(Hara 2019の(10))

一方シヨウについては、下記の例が示すように下降調のシヨウカ、上昇調のシヨウ、上昇調のシヨウカの全てが容認される。

- (6)a. 買い物に行こうか? ↓——{うん、頼む / うん、一緒に行こう }。
- b. 買い物に行こう? ↑——{*うん、頼む / うん、一緒に行こう }。
- c. 買い物に行こうか? ↑——{うん、頼む / *うん、一緒に行こう }。

さらに上記の例の返答が示すように行為の主体は、i) 下降調のシヨウカでは話し手だけでも聞き手を含むとも解釈され、ii) 上昇調のシヨウでは必ず聞き手も含むと解釈され、iii) 上昇調のシヨウカでは聞き手を含まないと解釈される。このようにまず上昇調のシヨウカが容認されること、さらにそれが下降調のシヨウカと異なる意味を表すことは、シヨウとダロウの平行性を勘案すると、上昇調のダロウカが容認されないことに対する上記の Uegaki & Roelofsen (2018) と Hara (2019)の分析に再考を促すことになるのではないかと考えられる。

本研究は、i) なぜ(6a-b)に見られるように上昇調のシヨウと上昇調のシヨウカで、行為の主体について正反対の制約が見られるのか説明し、ii) なぜ(5c)に見られるように上昇調のダロウカが容認されないのかについて、Hara (2020)の分析を援用しつつ新たな分析を提案することを目的とする。以下2節で先行研究を概観した後、3節で本研究の分析を提案する。最後に4節でまとめを行う。

2 先行研究

本節ではまず日本語学分野でのダロウ、シヨウについての代表的な分析である仁田 (1991)、宮崎他 (2002)と、通言語的観点から同様の指摘を行っている Bhadra (2020)の分析を検討する (2.1 節)。次に形式意味論・語用論の枠組みで提案された Uegaki & Roelofsen (2018)と Hara (2019)分析を検討する (2.2 節)。

2.1 仁田 (1991); 宮崎他 (2002); Bhadra (2020)

仁田 (1991: 153-154)は、ダロウカは自問的な疑いの文が基本だが「聞き手の居るところで、聞き手をめざして発すれば [...] 判断の問いかけを形成する」、ただし「事実的情報そのものを尋ねているのではなく、話し手自身の推し量りについて、相手からの何らかのコメントを求めている」としている。また一般に「上昇のイントネーションによる疑問表現も、対話性のものであり、<問いかけ>を表している」(同書 p. 177)、と指摘している。

ダロウ↑

仁田 (1991: 152)はさらに、(7a)のような上昇調のダロウについて、「相手からの情報を求めているものの、不明であるからではなく、自らの下した判断を確かなものとするために、相手からの確認や同意を求めている」ものであり、「<疑い>を消滅・減少・希薄化させることによって、<問いかけ>の質を変質させたもの」であることから、「疑似疑問」と呼んでいる。さらに「判定そのものは遂行していないものの、問いかけ内容の肯定確認を予定」(同書 p. 96)していることから「傾きを有する問いかけ」と呼んでいる (Sudo 2013: 18 も同様の指摘を行っている)。

- (7) よく見ろよ、雨が降っているだろ。(仁田 1991: 153)

Bhadra (2020)は通言語的観点から、証拠性を表す形式を含む疑問文において判断の主体が話し手から聞き手に変換しない場合、すなわち *interrogative flip* が生じない場合の疑問文の意味を、(8a)のようにパラフレーズしている。そして上昇イントネーションの平叙文には話者の判断の傾き (*bias*)があり、(8b)に述べられるように、疑問の意味を伴うに

しても、それは聞き手に確認を求めることから生じる「疑問的効果 (interrogative effect)」(仁田 1991 の「擬似疑問」に相当) でしかないとしている。

- (8)a. “I have x type of evidence for the proposition *p*; can you (= the addressee) confirm that *p* is true?” (Bhadra 2020: 371)
b. “the speaker is dependent on the addressee for the ratification of the speaker’s inference. The ‘interrogative’ effect associated with [Raising Declarative] thus comes from the ‘confirmational’ flavor introduced by the rising intonation on a syntactically declarative form” (idem.375)
c. ‘the request for confirmation only targets the at-issue content -the proposition– not the evidential quantification.’ (idem.371)
(9) A: よく見ろよ、雨が降っているだろ。 – B: うん、降っている。 / #うん、君の推測通りだ。

Bhadra (2020)はさらに(8c)のように、聞き手への確認は命題にだけ関り、判断の根拠 (証拠性)に関わるものでないとしている。この指摘は上昇調の「ダロウ? ↑」にも当てはまり、(9A)への返答として、言及されている命題内容を確認するものは適切だが、話者の推量を確認するものは不適切である。

シヨウ↑

- (10) もう少し独身でいよう? (仁田 1991: 176)

次に(10)のような上昇調のシヨウについて、仁田 (1991: 176)は「上昇のイントネーションを伴った[(10)]はもはや<意志の疑問表現>ではありえない。既に[...]<誘いかけ>である」としている。同様に宮崎他 (2002)は、(10)のような例について「話し手はすでにその行為を実行することを決めているが、聞き手はその行為に対する態度を決めていない。このような状況で、聞き手をその行為に引き込もうとする」ものだとしている。

シヨウカ↑

- (11) あの、ぼくが見てみましょうか。(仁田 1991: 157)

仁田 (1991: 157)はまた(11)のようなシヨウカを「意向の問いかけ」と呼び「<意向の問いかけ>の表している事態は、話し手の意志の遂行といったものである。話し手の意志の遂行そのものが、話し手にとって不明である、ということではありえない。話し手にとって不明でありしたがって問いかけの対象になるのは、話し手の意志の遂行そのものではなく、その遂行を受け入れる意向が、聞き手にあるのか否か [...] である」と指摘している。同じ機能を宮崎他 (2002: 36)は「行為の申し出」と呼び、「<提案>が疑問化された [= 行為主体が聞き手を含む]「しようか」は下降イントネーションをとる」のに対し、「<行為の申し出>が疑問化された [= 行為主体が聞き手を含まない]「しようか」[は]上昇イントネーションで発話される」という観察を述べている。

このように仁田 (1991)、宮崎他 (2002)は、上昇調のシヨウ、シヨウカが表す意味について詳細な記述・分析を行っているが、i) なぜ上昇調シヨウは「誘いかけ」「引き込み」を表すのか、すなわち行為の主体に聞き手も含まれるのか、ii) なぜ上昇調シヨウカは「意向の問いかけ」「行為の申し出」を表すのか、すなわち行為の主体から聞き手が排除されるのか、詳しい説明がない。またなぜ上昇調シヨウカは容認されるのに、上昇調ダロウカが容認されないのかについての説明が見られない。次節ではこの点について Hara (2019)と Uegaki & Roelofsen (2018)の分析を検討する。

2.2 Hara (2019); Uegaki & Roelofsen (2018)

Hara (2019)、Uegaki & Roelofsen (2018)は、inquisitive epistemic logicの枠組みからダロウについて新たな分析を提案している。この枠組みは、KnowオペレーターとEntertainオペレーターという2つの様相オペレーターを備えており、前者はある認知主体の知識を、後者は概略認知主体がどのような問題を検討しているか表す (“[an entertain modality] encodes an agent’s inquisitive state, which encapsulates the issues that the agent entertains” Hara 2018: 6)。この枠組みでは平叙文も疑問文も意味論的には同じく「命題の集合」を表すため、2つのオペレーターは平叙文も疑問文も項としてとることができる。さらにEntertainオペレーターが平叙文を項としてとる場合はKnowオペレーターと同じ意味を表すことになる。Entertainオペレーターが平叙文と疑問文を項としてとり認識主体が話者である場合の意味は、それぞれ英語のI believe、I wonderに相当する。Hara (2019)、Uegaki & Roelofsen (2018)は、こうした枠組みから、ダロウはEntertainオペレーターが認識論的様相基盤を持つ場合を具現化したものだと提案する。さらに基本的に認識主体は話者に限られることも指摘している。

Hara (2019)はさらに、発話行為に関わる意味を使用条件(use-condition)的意味として、真理条件(truth-condition)的意

味から区別した上で、ダロウは断定(assertion)という使用条件的意味を表すとしている。Hara (2019)の分析によるダロウの意味は(12a)のように表すことができる。

- (12)a. [[ダロウ]]= $\lambda\phi$.ASSERT(^{epistemically}Entertain_{speaker}(ϕ))
 b. λp . ASSERT (^{epistemically}Entertain_{speaker} p): I assert that I epistemically entertain that p (=I assert that I believe that p)
 c. λp . ASSERT(^{epistemically}Entertain_{speaker} ?p): I assert that I epistemically entertain if p (=I wonder if p)

ダロウは2つの異なる層の意味を含むという分析は Uegaki & Roelofsen (2018: 819)にも見られる。彼らは、真理条件的意味を at-issue meaning、Hara (2019)の使用条件的意味に相当する意味を non-at-issue meaning とし「 ϕ ダロウ」は i) at issue meaning としては「whether ϕ 」を、ii) non-at-issue meaning としては「話者が ϕ を entertain している」ことを表す、としている。

Hara (2019)はさらに、下降調のカ、上昇イントネーション、上昇調のカの意味を(13a-c)で表している。これら三者は全てその意味に疑問オペレータ (命題をとり、疑問文=答えとなる選択肢の集合を返し、記号?で表される) を含むが、意味的タイプの違いがある。上昇イントネーションと上昇調のカは聞き手に「問いかけ」という発話行為を行う使用条件的オペレータである一方、下降調のカは「問いかけ」を含まない、真理条件的オペレータである。「問いかけ」は疑問文を項としてとる QUEST オペレータで表されている。

- (13)a. [[カ↓]]= λp .?p : 真理条件的オペレータ
 b. [[↑]]= λp .QUEST (?p) : 使用条件的オペレータ
 c. [[カ↑]]= λp .QUEST (?p) : 使用条件的オペレータ

また Hara (2019)によれば、三者には構造的な違いもある。終助詞カという形態的支えをもつ下降調のカと上昇調のカは文に統語的に (syntactically) 組み込まれるのに対し、形態的支えを持たない上昇イントネーションは文に並列的に (paratactically) 組み込まれる。このように仮定した上で Hara (2019)は、下降調の「ダロウカ↓」、上昇調の「ダロウ↑」、上昇調の「ダロウカ↑」の意味をそれぞれ(14a-c)のように表している。p は命題を、◆ は並列的 (paratactical) 組み合わせを表す。(14a-c)の意味は、p が「雨が降る」だとすると英語では(15a-c)のようにパラフレーズされる

- (14)a. [[p ダロウカ↓]]=[[ダロウ]]([[p カ↓]])= λp .ASSERT (^{epistemically}Entertain_{speaker}(ϕ))(?p)=ASSERT(^{epistemically}Entertain_{speaker}?p)
 b. [[p ダロウ↑]] = ASSERT (^{epistemically}Entertain_{speaker} (p)) ◆ QUEST (?p)
 c. *[[p ダロウカ↑]] = ASSERT (^{epistemically}Entertain_{speaker} (QUEST (?p)))
 (15)a. I assert that I epistemically entertain if it rains (=I assert that I wonder if it rains).
 b. I assert that I believe that it rains ◆ Is it the case that it rains? (I ask you if it rains).
 c. *I assert that I believe is it the case that rains ? (I assert that I believe that I ask you if it rains).

Hara (2019)によれば、(14a)では表層の語順に反しカよりダロウの方が広いスコープをとり「p ダロウカ↓」の意味はダロウが項として「p カ↓」を取るようになる。Uegaki & Roelofsen (2018)も同様の分析を提案している。この提案によると下降調「ダロウカ↓」は全体として下降調「ダロウ↓」と同じく、認知的モダリティ表現の一つであることになるが、この分析は、宮崎 (2005)が指摘するように、「ダロウ↓」が推量の副詞「たぶん」と共起するのと同じく、「ダロウカ↓」も推量の副詞「もしかして」と共起することからも裏付けられる。

次に上昇調「p ダロウ↑」について(14b)が表すように、その意味は i) 「p ダロウ」が表す断定と ii) p の真偽に関わる問いかけという二つの発話行為の並列的組み合わせとなる。ダロウと上昇イントネーションはどちらも使用条件的意味を表すが、両者が並列的に組み合わせられるためタイプミスマッチは生じない。(14b)の表すこうした意味は、仁田 (1991: 152)による「自らの下した判断を確かなものとするために、相手からの確認や同意を求めている」という上昇調のダロウの特徴づけとも符合するものである。

最後に上昇調「p ダロウカ↑」について Hara (2019)は、この場合も下降調「p ダロウカ↓」の場合と同様、(14c)が示すようにダロウはカより広いスコープをとると提案する。従ってダロウは項として使用条件的意味を表す「問いかけ」をとることになるが、ダロウは項として真理条件的意味を表すものしかとることができないのでタイプミスマッチが生じる、そのため上昇調のダロウカは容認されない。一方 Uegaki & Roelofsen (2018: 823-824)は、上昇調「ダロウカ↑」が容認されないことを blocking により説明している。すなわち彼らによると、上昇調「ダロウカ↑」は下降調「ダロ

ウカ↓]と同じ意味を表すが、上昇イントネーションという有標性を帯びているため当該の意味を表すために採用されない。一方 Hara (2019)の分析によると、上昇調「ダロウカ↑」も下降調「ダロウカ↓」も最終的に断定という発話行為を担うが、両者はダロウと合成される疑問文が問いかけという発話行為を果すかどうかで異なる。

以上の Hara (2019)の分析は、仁田 (1991)や宮崎他 (2002)の鋭い観察を的確に表現する優れたものであるが、以下の2つの問題点があると思われる。まず1節で見たようにシヨウはダロウと同様の振る舞いを示すことから発話行為を担い(仁田1991は「表出」を担うとしている)使用条件的意味を表すと思われるが、問いかけという使用条件的意味を表す「カ↑」と組み合わせられた「シヨウ+カ↑」は容認される。このことから2つの使用条件的オペレータが組み合わせられる際にはタイプミスマッチを防ぐため何らかの方策がとられると考えられる。次に上昇調の「シヨウカ↑」は全体として問いかけの文と解釈される、すなわち上昇調の「カ↑」がシヨウより広いスコープをとる。シヨウとダロウの平行性を勘案すると、Hara (2019)の提案に反し、上昇調の「ダロウカ↑」でも「カ↑」はダロウより広いスコープをとるのではないかと考えられる。結局上昇調の「ダロウカ↑」が容認されないのはタイプミスマッチという意味的要因ではなく、別の要因による可能性がある。次節ではこうした可能性について、本稿の仮説を提案する。

3 提案

本節では、ダロウと3つのタイプの疑問文(下降調のカ、平叙文につく上昇イントネーション、上昇調のカ)の意味については基本的に Hara (2019)の分析を採用しつつ、まず3.1節でシヨウの3つの疑問形の意味を表すことを試みる。次に3.1節での議論をもとに、3.2節で上昇調の「ダロウカ?↑」が容認されない理由を再検討する。

3.1 意志の疑問文

まず Hara (2019)、Uegaki & Roelofsen (2018)が採用している *inquisitive epistemic logic* の枠組みを拡張し、認識論的な様相基盤に当てはまるのが、目的論的な様相基盤にも当てはまると想定する。そして1節で見たダロウとシヨウの基本的な共通点を踏まえ、シヨウはダロウと同様 *Entertain* オペレータを具現化したものであるが、ダロウが認識論的な様相基盤を持つのに対し、シヨウは目的論的な様相基盤を持つと提案する。認識論の様相基盤は「認識主体の持つ知識と整合する可能世界の集合」からなり、目的論の様相基盤は「行為主体の持つ目的と整合する可能世界の集合」からなる (Copley 2010; Grano 2022 を参照)。さらにシヨウの行為主体は基本的に話者であり、その補部は *PRO* を主語とし、i) シヨウが平叙文(概略 *PRO to do* で表される)を項としてとる場合は英語の *intend* に相当し、ii) 疑問文(概略 *PRO to do or PRO not to do* で表される)を項としてとる場合は *hesitate* に相当すると提案する。この仮説によると「私は行こう」の意味は(16a)のように表され、英語では(16b)のようにパラフレーズできる。以下注意すべきは、(17)のように *PRO* の指示対象に主節主語だけでなくそれ以外の人も含まれる場合 (*partial control* と呼ばれる)もあることである。

(16)a. [[私は行こう]] = $\text{ASSERT}^{(\text{teleologicallyEntertain}_{\text{speaker}}(\text{go}(\text{PRO})))}$

b. I assert that I teleologically entertain PRO to go (=I assert that I intend PRO to go).

(17) John_i agreed to PRO_{i+k} meet thanks to our pressures. (Landau 2015: 77)

そして Hara (2019)の下降調の「ダロウカ↓」、上昇調の「ダロウカ↑」の分析を援用し、下降調の「行こうか↓」と上昇調の「行こう↑」をそれぞれ(18a-b)のように分析することを提案する。それぞれの意味の概略を英語でパラフレーズすると(19a-b)となる。

(18)a. [[行こうか↓]] = $\text{ASSERT}^{(\text{teleologicallyEntertain}_{\text{speaker}}(?go(\text{PRO})))}$

b. [[行こう↑]] = $\text{ASSERT}^{(\text{teleologicallyEntertain}_{\text{speaker}}(\text{go}(\text{PRO})))} \blacklozenge \text{QUEST} (?go(\text{PRO}))$

(19)a. I assert that I teleologically entertain PRO to go or PRO not to go (=I assert that I hesitate PRO to go)

b. I assert that I teleologically entertain PRO to go (=I assert that I intend to go) \blacklozenge Is it the case for PRO to go?

(18a)が対話場面で発話され *PRO* が話者だけと照応する場合、「申し出」の意味が生じる。*PRO* の指示対象が聞き手も含む場合、「誘いかけ」の意味が生じる。(18b)においては仮に *PRO* が話者のみと照応するとすると、聞き手に「話者が行く」ことの真偽を問うことになるが、この質問内容は話者がその真偽を事前に知ることができるものであり、また聞き手は真偽を判定できないものである。Farkas (2020: 13)は規範的な疑問文が果たすべき条件として、「問いかけでは、話者は答えを知っているはずではない」という *Speaker ignorance* の原則と「質問内容は聞き手が答えられ

ると想定できるものでなくてはならない」という *Addressee competence* の原則を挙げているが¹、PRO が話者のみと照応する場合、この2つの原則に違反することになる。この二つの原則を満たすためには PRO の指示対象は話者だけでなく聞き手も含まなければならない。

上昇調の「行こうか↑」については、本研究では、Hara (2019)の上昇調の「ダロウカ↑」の分析とは異なり、(20a)のように語順どおりカがシヨウより広いスコープをとると提案する。さらに仁田 (1991: 182)の「<意向の問いかけとは、<意志の疑い>[シヨウカ]に<問いかけ>[上昇イントネーション]が加わったものではない」という指摘に従い「行こうか?↑」は「行こうか+?↑」と合成されるのではなく「行こう+カ?↑」と合成されると提案する。この提案は上昇イントネーションが「カ」だけに置かれることと符合する。そして問いかけが断定という使用条件の意味を表す要素を項とするというタイプミスマッチを防ぐために、(20a)が示すように、シヨウは断定オペレータを伴わない真理条件の意味を表すものにタイプシフトされると提案する。

(20)a. [[行こうか↑]] = [[カ↑]] ([[行こう]]) = QUEST^(teleologically?) ~~I assert that~~^{teleologically} Entertain_{speaker} (go(PRO))

b. Is it teleologically the case that I teleologically entertain to go? (=Is it OK that I intend PRO to go?)

さらに、この場合問いかけは表されている命題が、目的に即して妥当かどうか聞き手に問う(英語では Is it OK に相当することになると主張する。この分析は 2.1 節で見た「[上昇調のシヨウカで]話し手にとって不明でありしたがって問いかけの対象になるのは、話し手の意志の遂行そのものではなく、その遂行を受け入れる意向が、聞き手にあるのか否か[...]である」という仁田 (1991: 157) の指摘とも符合するものである。

さてここで PRO の指示対象に聞き手も含まれる場合、聞き手に自分自身の行為に OK を出すかどうか問うことになり、語用論的に不適切である。このため上昇調のシヨウカは、聞き手を含まない、すなわちもっぱら申し出を表すことになると提案する。上昇調の「シヨウカ?↑」についての上記の考察を踏まえ、次節では上昇調の「ダロウカ?↑」が容認されない理由について再検討する。

3.2 上昇調の「ダロウカ?↑」再考

まず上記の上昇調の「シヨウカ↑」についての分析を敷衍し、Hara (2019)の分析と異なり、(21a)のように「φダロウカ↑」では語順どおりカがダロウより広いスコープをとりさらに「φダロウ+カ↑」と合成されると提案する。そして「カ↑」が項として断定という使用条件の意味を表す「φダロウ」をとるというタイプミスマッチを防ぐために、(21a)が示すようにダロウから断定オペレータを取り除くタイプシフトが生じると提案する。

(21)a. #[[雨が降るダロウカ↑]] = [[カ↑]] ([[雨が降るダロウ]]) = QUEST^(epistemically?) ~~I assert that~~^{epistemically} Entertain_{speaker} (it rains)

b. #Is it epistemically the case that I epistemically entertain that it rains (= Is it true that I believe that it rains?)

しかし(21a)のパラフレーズ(21b)の不自然さから明らかなように、話し手の信念についてそれが認識論的に妥当であるか聞き手に質問することになり、「問いかけでは、話者は答えを知っているとはならない」という *Speaker ignorance* 原則にも「質問内容は聞き手が答えられると想定できるものでなくてはならない」という *Addressee competence* にも違反する。

このように本稿では、上昇調「ダロウカ↑」が容認されないのは、1) Uegaki & Roelofsen (2018)が主張するように結局下降調「ダロウカ↓」と同じ意味を表すからでも(本稿では上昇調と下降調のダロウカはそれぞれ問いかけと断定という異なる発話行為を担うと考える)、2) Hara (2019)が主張するように2つの発話行為を合成することによるタイプミスマッチから生じるのでもなく、たとえタイプミスマッチを防ぐためにタイプシフトが行われても、問いかけを行うために必要な条件が満たされないという語用論的な理由によると提案する。この仮説によると上昇調シヨウカとダロウカの容認度の違いは、最終的には様相オペレータ *Entertain* がそれぞれの場合どのような様相基盤を持つか、

¹ Farkas (2020)は典型的な疑問文が満たすべき条件として、次の4つの条件を挙げている。

- (i) Open issue: the Speaker assumes that the issue she evokes is not resolved in the input context.
- (ii) Speaker ignorance: the Speaker presents herself as not knowing the answer to the question.
- (iii) Addressee competence: the Speaker presents herself as assuming that the Addressee knows the answer.
- (iv) Addressee compliance: the Speaker presents herself as assuming that the Addressee will give the answer.

すなわち目的論的か認識論的か、さらにそれに応じて問いかけの発話行為が語用論的に適切なものと解釈しうるかに帰着することになる。

4 結論

本研究は、Hara (2019)、Uegaki & Roelofsen (2018)が指摘するように上昇調の「ダロウカ？↑」が容認されない一方、ダロウと基本的な共通点を持つシヨウの疑問形「シヨウカ？↑」が容認されるのはなぜか考察した。その際シヨウの補部の主語はPROであると提案し、シヨウが誘いかけを表す時、行為主体に話し手だけでなく聞き手も含まれることをpartial controlとして分析した。さらにダロウとシヨウはどちらも同様の働きを担う様相オペレータEntertainを具現化したものであるが、前者は認識論的様相基盤を持つのに対し後者は目的論的様相基盤を持つと提案した。Hara (2019)、Uegaki & Roelofsen (2018)は、認識論的Entertainオペレータ(I epistemically entertainでパラフレーズされる)が平叙文(命題)を項としてとる場合は英語のI believeに、疑問文(命題の集合)を項としてとる場合はI wonderに相当すると提案しているが、本発表では同様に目的論的Entertainオペレータ(I teleologically entertainでパラフレーズされる)が項として命題(PRO to do)と命題の集合(PRO to do or PRO not to do)を取る場合は、それぞれI intendとI hesitateに相当すると提案した。またHara (2019)による3つの疑問形(下降調カ、上昇調平叙文、上昇調カ)とダロウの分析を援用しつつ、上昇調のシヨウとシヨウカがそれぞれもっぱら誘いかけ(例「行こう?」)と申し出(例「行こうか?」)を表すことに対して、問いかけとしての適切さに必要なSpeaker ignorance、Addressee competenceの原則を満たすのはどのような解釈かという観点から新たな分析を提案した。最後に上昇調のダロウカとシヨウカの容認度の違いについては、それぞれがどのような様相基盤を持つか(目的論的か認識論的か)、さらにそれに応じてSpeaker ignorance、Addressee competenceの原則を満たす解釈が得られるかの違いに帰着すると論じた。

ただし本研究には不十分な点も多い。例えば、本来認識論的モダリティの分析のために提案されたEntertainオペレータを、目的論的モダリティに拡張して適用することを提案しているが、そもそもこうした拡張が妥当かどうかについて、現段階では説得的な議論が展開できていない。今後の課題としたい。

参考文献

- Bhadra, D. 2020. The Semantics of Evidentials in Questions. *Journal of Semantics*, 37.3, 367–423.
<https://doi.org/10.1093/jos/ffaa003>
- Copley, B. 2010. Towards a Teleological Model for Modals.
https://www.academia.edu/1688187/Towards_a_Teleological_Model_for_Modals
- Farkas, D. F. 2020. Canonical and non-canonical questions. <https://semanticsarchive.net/Archive/WU2ZjIwM/questions.pdf>.
- Grano, T. 2022. In the mood for intention. https://ail-workshop.github.io/AIL2-Workshop/docs/Grano_AIL2.pdf
- Hara, Y. 2018. *Daroo* as an entertain modal: an inquisitive approach. In S. Fukuda, M. Shin Kim, & M.-J. Park (eds.) *Japanese/Korean Linguistics*, 25. CSLI Publications.
- Hara, Y. 2019. *Daroo ka↑*: The interplay of deictic modality, sentence type, prosody and tier of meaning.
<https://www.semanticscholar.org/paper/Daroo-ka%26%3A-The-interplay-of-deictic-modality%2C-type%2C-Hara/98f54ce8abf180d89674d4d218cc33a6064d936b>
- Landau, I. 2015. *A Two-Tired Theory of Control*. The MIT Press.
- 宮崎和人 2005. 『現代日本語の疑問表現 疑いと確認要求』ひつじ書房
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 2002. 『モダリティ 新日本語文法選書4』くろしお出版
- 仁田義雄 1991. 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- Sudo, Y. 2013. Biased polar questions in English and Japanese. In D. Gutzmann & H.-M. Gaertner (eds.), *Beyond Expressives: Explorations in Use-Conditional Meaning*. Leiden: Brill, 275-295.
- Uegaki, W. & F. Roelofsen. 2018. Do modals take propositions or sets of propositions? Evidence from Japanese *darou*. *Proceedings of SALT*, 28, 809-829.